

強く孤高だった人魚の女王は、けれども美しい悪魔にどうしようもない恋をしてしまったのです。立場を忘れるわけにはいきません。じりじりとその身を焼かれるような恋心に、人魚の女王はもう自身が壊れてしまいそうでした。助けて、と声にならない叫びはその悪魔を喚び、食べてあげよう、と甘く囁かれて。

愛はコンビニでも買えると聞いていたけれど、きっと都会だけなんだろうなと思ってた。「愛、入荷しました」と書いてあるポップを見つけて本当なんだ、と驚く。そこまで高いものでもなかったので試しに買ってみた。レジ袋は断って、手のひらの愛は暖かく柔らかく、けれどどう扱えばいいかわからない。

月明りの夜に捧げられた贅は震えながらそのときを待ちました。柔らかな明かりの中、夜は静かでいつまでも続くようでした。ざわり。空気が変わります。現れた美しい獣はまず、贅をその光る眼で舐めまわします。贅はすべてを諦めてその視線を受け止めます。獣は笑ったようでした。月が、雲に隠れました。

お問い合わせありがとうございます。こちらは、一流の魔法使いが勿忘草から抽出した忘却薬のジェネリックでございます。成分的には正規品と変わりありませんが、より吸収しやすく、より安全に効果が出るよう設計されております。具体的には恋心を忘れることに特化しております。薬局でご相談ください。

早朝、布団から出られない。これは私が急情なわけではなく、布団の方が私を離れてくれないのだ。確かに私と布団はいい仲ではあるのだけれど、おそろく布団の方が愛は重く、目を覚ましてとるところとまどろむお私を布団は優しく抱き込んでくる。朝の準備をする時間になっても、布団は行くかと私を離さない。

寒い日。冬の夜からキスをされた。びくりしてしていると夜はふふ、と微笑んで、暖めてあげようか、と訊いてくる。遠慮しとく、と返すと、残念、と笑う。こたつとかあるよ、と付け加えてきたけれど再度、遠慮しとく、と返事をして、ストーグの上のヤカンから急須にお湯を注ぎお茶を淹れる。湯香はふたつ。



BlueSkyにて毎朝更新している140字小説の中から、恋にまつわるものを6篇まとめました。感想フォームで下の二次元コードは感想をお寄せください。喜びます。



春は恋の季節
2026.01.09
氷砂糖
longway12km@yahoo.co.jp